慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	キャノン・バーネット『理想都市』
Sub Title	Canon Barnett, The ideale city
Author	Canon, Barnett(Nishiyama, Shiho) 西山, 志保
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2005
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 : 人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.61 (2005.) ,p.109- 118
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	翻訳
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000061-0109

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

キャノン・バーネット『理想都市』

Canon Barnett, THE IDEALE CITY

西　山　志　保*訳
Shiho Nishiyama

解　題

私は院生時代からロンドンで，インナーシティ問題に取り組むボランタリー組織を調査している関係で，イーストエンド (East End) と呼ばれる古くからの下町に何度も足を運んでいた。2004年の夏，地下鉄アルゲイト (Algate East) 駅の近くを歩いていたとき，思いもかけず，S. バーネット (Canon Samuel Barnett) らがセツルメント活動の拠点とした有名なトインビー・ホール (Toynbee Hall) を発見した。もちろん，バーネットが世界初のセツルメントとして設立したトインビー・ホールのことは知っていたが，トインビー・ホールが残っており，いまなお活動していることを知ったのは，その時が初めてであった。

イーストエンドの歴史は，17世紀にフランスから宗教的弾圧を受け亡命した新教徒ユグノー派が移住した時期から始まる。この地区は18世紀末からの産業革命の進行に伴って，ロンドンの外港として巨大な埠頭が建設されるとともに，港湾労働に従事する労働者やその周辺に建てられた工場で働く労働者が集住する地域となった。その後，ロンドンの東に位置するイーストエンドは産業化の進行とともに劣悪な環境をもつ地域として拡大していった。イーストエンドは失業と疫病の蔓延するロンドンの代表的な貧困地区となったのである。

1880年代になると，キャノン・バーネットのような若い熱心な牧師が福音を授けるために貧民街に定着し始める。彼らは福祉施設を建設し布教活動ばかりでなく，社会活動や教育活動の幅広い慈善活動を展開していった。とりわけトインビー・ホールは「セツルメントの母」と呼ばれ，世界で最初のセツルメント運動が開始された場であるとともに，労働者の教育や環境改善，社会立法促進運動などを展開した場所として有名である。戦後，イースト・エンドにはベンガル人を中心にインドから大量の移民が流入し，その後も貧困やマイノリティなどの社会問題を抱える地域となった。イースト・エンドには，M. Yong & P. Willmot, *Family and kinship in East London*, 1954. など多くの貧困研究がある。最近も，R. Luptom, *Poverty Street*, 2003. や K. Mumford, & A. Power, *East Enders*, 2003. など研究書の刊行が相次いでいる。

* 山梨大学大学院医学工学総合研究部助教授

著者のキャノン・バーネット（Canon Barnett 本名 Samuel Augusut Barnett）はイギリス国教会牧師で，社会改良家として有名である。バーネットは 1844 年にイギリス南西部のブリストル (Bristol) 生まれ，1862 年に保守主義で有名なオックスフォード大学のワォーダム・カレッジ (Wadham College) で歴史と法学を学んだ。その後，パブリック・スクールの教師になるが 2 年でやめ，1867 年にロンドンのマリラボン地区にあるセント・メアリ教会に勤めている。この時から貧民救済と教育文化活動に本格的に取り組むようになる。1913 年にロンドンで死没するまで，ロンドンの極貧地区の小教区の牧師 (Church of England clergymen) を勤め，成人夜間学校を設立するなど社会事業に献身した。

バーネットは 1875 年に，オックスフォード大学の学生であった A. トインビーが小教区を訪問したことを契機に，オックスフォード大学生と交流を開始し，セツルメント運動を展開するようになる。しかし残念なことに卒業後教師となり精魂こめた教育と多忙な社会活動でセツルメント運動の中心を担っていたトインビーは，わずか 30 歳で生涯を終えた。そのトインビーを偲んで，世界最初のセツルメントとして 1884 年に創設されたのが，トインビー・ホールである。その目的は，貧民街の住民に教育，レクリエーション，娯楽を提供すること，また貧困状態を調査して，福祉を促進する具体的計画を考案することにあった。実際に，ロンドン貧困調査を行った C. ブースの科学的調査法などに基づき，トインビー・ホールの調査団が積極的な貧困調査を行っている。その動きは，イギリス国内のみならず，有名なシカゴのジェーン•アダムス (Jane Adams) のハル・ハウス (Hull House) をはじめフランスやドイツのセツルメント運動に大きな影響を与えた。また，日本でも片山潜が 1894 年にトインビー・ホールを訪問して，最初のセツルメントとして神田三崎町にキングスレー館を創設している。現在のトインビー・ホールの主な活動は，地域コミュニティから孤立する移民や子供，高齢者のニーズに対応するような慈善活動，教育活動，留学生への宿舎提供など，伝統的活動を受け継ぎつつも，広い意味での地域コミュニティへの支援活動へと幅を広げている。

また，バーネットによるトインビー・ホールの活動は，学問領域にも大きな影響を与えた。それはイギリス社会学の展開のみならず，アメリカの社会学にも大きな影響を与え，シカゴ大学は 1892 年に世界で最初の社会学部を創立している。その際，都市研究はゼブリン (C. Zueblin) はじめセツルメント運動の中心であったハル・ハウスと密接な関係をもっていた。創立時のシカゴ大学社会学部のビック・フォー (Big Four) の一人とされたヘンダーソン (C. Henderson) も，ボランティア組織の研究に取り組んでいる。

イギリスで成立した P. ゲデスの都市社会学 (Civic Sociology) は社会改良的の側面を強く志向していた。しかし藤田弘夫が『都市と文明の比較社会学』(2003, p. 248) で指摘するように，シカゴ大学で R. E. パークが都市研究を主導し，人間生態学 (Human Ecology) を方法論とする研究が勃興するとともに，都市科学的側面を強調する都市社会学 (Urban Sociology) へと転換していった。その過程で，都市社会学の研究分野から社会福祉や都市計画などが分離されることになった。このために，バーネットの活動も都市研究では完全に忘れ去られ，もっぱら福祉領域で注目される存在となったのである。しかし都市社会学の領域で，近年，福祉やボランティア/NPO 論が再びテーマ化されてことは，あらためて，バーネットやゲデスの研究を考える契機ともなっている。

資本主義の発展は都市を未曾有の規模にまで膨張させるとともに，都市は貧困，失業，疫病，飢餓，不平等など社会病理の巣窟となっていた。こうしたなかで，これらの問題を実践レベルで解決しようとするさまざまな試みがなされていた。バーネットもその一人であった。彼はイースト・エンドでの 20

に及ぶ活動の後，1893年にロンドンから西南にあるブリストルの司教座聖堂参事 (Canonry) に任命される。理想都市 “THE IDEAL CITY” は1893〜1894年に，ここで書かれたものである。

では，バーネット目指した理想都市とは，どのようなものだったのであろうか。バーネットの考える理想都市は，貧富の差がなく，豊かな文化が蓄積される魅力的な場所，個人が自己の利益を優先せず，他者への配慮によって暮らしている場所である。かれはこの理想都市を実現するために，必要となる「理念」を明確に示すこと，そしてその「理念」を市民が共有していくことを強調する。ともすれば経済原理が最優先され，都市の「理念なき開発」が横行する日本において，バーネットの議論を俎上に乗せることは，あらためて都市社会を問い直す一助となるだろう。

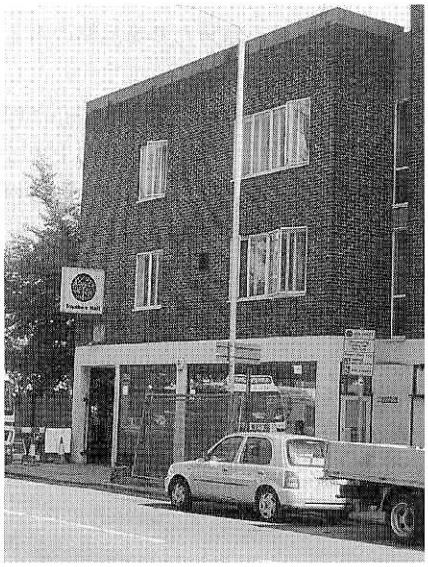

写真 1. 現在のトインビーホール正面

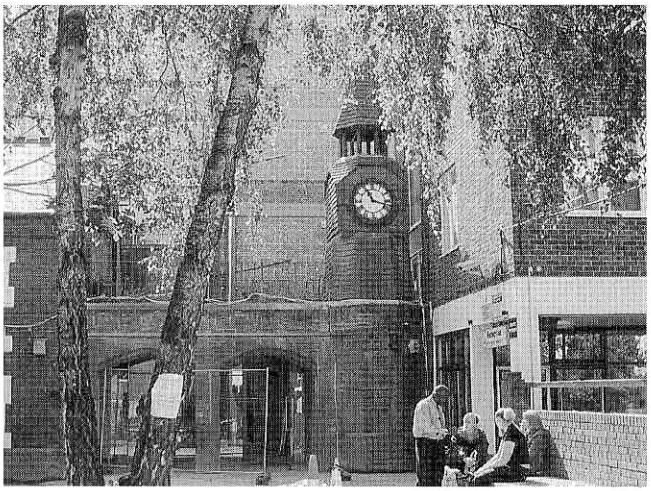

写真 2. 現在のトインビーホール中庭

キャノン・バーネット　理想都市
Canon Barnett, THE IDEALE CITY

都市の人口が増える一方で，農村の人口が次第に減少している。都市では，長く，どんよりとした道を歩きながら頭を振り，息苦しい空気を吸う人々の青ざめた顔をみることができる。「神は農村をつくり，人間は都市をつくる」と繰り返している。彼らの心は，未来を思うと沈み，「都市は，人々で溢れかえり，騒音が激しく，視界が悪く，静寂な気持ちを決して味わうことのできない場所だ」という。

人々は人間にとって最も可能性のある人生が，都市生活であることを忘れている。預言者は，都市は楽園でも庭園でもないといっていた。しかし都市には，街路，市場など，好奇心をそそる多くのモノと人生の賑わいがある。ダビデ (David) は，人間が戦いを見るためにしばしば羊の囲いを解き放つことがあると言う。

我々は田舎を離れ，共に家をつくるという歴史の流れの中にある。「神の都市」では，街路や店，町集会での活動が，人生の最も良き時間を生み出している。都市の隣人は，木や獣ではなく仲間の人間であ

る。我々は隣人から多くのことを学び，一緒に良い行動をとる。それによって，さらに人間的になる。

田舎は，ある人々にとっては，まだ最も良い場所である。おそらく人生のある期間過ごすにはとてもよい――理想都市があるように理想農村がある。しかし農村から都市へという動きは明らかである。その結果，都市を最高の形にしなくてはいけない。市民の健康に良いというのはもちろん，財産という点でも良いものにしなくてはならない。

この論文の目的は，まだ到達していない「理想の都市」を提示することにある。

理想都市は，25～50 万人の市民が暮らす程の広さである。それゆえに多様な人生と仕事がある。市民は，多くの思想や多様な経験のぶつかりあいから生まれる興味を身近に感じるだろう。彼らはもはや，時代の新しい危険や新しい喜び，疑問を発見するために，ロンドンまで行く必要はない。なぜなら都市は規模が大きいゆえに，全市民が強い責任感をもっているからである。彼らは，自分たちを品格のある都市の市民と思い，そのように行動するし，そのように扱われることを期待している。

理想都市は，海外に行き来する船が寄港する港のような場所である。市民の会話は，個人的関心に埋没することなく他者の生活方法や楽しみ方について耳を傾け，見識を広げる。数マイル離れた海上では嵐や風が吹き，緊張を強いられながら人々が激しい争いを繰り広げているが，橋に立った時に彼らの想像力はふくらみ，水の流れに沿って思考は海へと広がっていく。そしてその思考は大英帝国をつくるために森や砂漠を切り開く新しい国々にまで広がっていく。海に近い都市は責任が重く，船乗り人口を抑制するために宗教と政府の役割は大きい。しかし市民の間には，思想の自由，詩情，冒険心が満ち溢れている。

理想都市は，丘の見える場所にある。いつの時代も詩人は，丘に救いを求めるが，それは無駄なことではない。丘の近くで暮らす市民は，丘の反対側について思いをめぐらせ，イタリア都市の市民のように絵に残したいという希望を持つ。彼らはもっと現実的な方法で，田舎への旅を計画したいと思い，自然についての知識を得ようとする。そして休暇に田舎を訪れることで，田舎の美しさを一層好きになる。それは最も強い愛国心の基盤となる。

理想都市は，何世紀にもわたって成長を続けており，多くの苦難と勝利の印を刻みつけている。イギリス人がノルマン人に征服されたときに使っていた建物が残っている。昔の人々がハンマーで打ち砕いた痕跡も残っているだろう。いくつかの建物は，権勢を誇った時代の面影を残している。また道から外れたところには，都市の自由解放のために戦って死んでいった人々の要塞や城が残されている。

理想都市を歩くと，市民は，奇妙な名前が記され，不思議に曲がりくねったいくつかの塔を見て，不思議な気持ちを抱くかもしれない。そして踏みしめている土地が，都市を築いた祖先の苦労を示す聖なる場だということを告げる声が聞こえてくる。これにより市民は謙虚な気持ちになり，ある種の霊感を受ける。そしてこの２つの気持ちが，満たされた中で結びつく。

理想都市は，新しいものだろう。大人や子供が死んだ狭い街路は，もはや残っていない。伝染病にかかった家族が満ち溢れた家々はもうない。悪臭や汚物，危険はもはやない。騒音に満ち溢れた学校の建物はもはやない。恐ろしい天罰が下される樹木でおわれた墓地はない。危険な仕事，厳罰を下す刑務所はもうない。醜い不道徳きわまる屠殺場ももうない。

理想都市は新しい都市となるだろう。通りは広く，街灯で明るく照らされている。住宅は立派で水道が完備され，暖房もあり，住民の健康を配慮している。都市のスペースは広く，運動場も広く，近隣には小公園もある。公共施設はその目的に応じて，様々な建築様式をもっている。

都市には人々が集う大聖堂があり，様々な興味ある活動を行う場となり，人々をより高い関心，つまり神のために仕えるという関心に導いていく。教会やチャペルが点在し，人々に常に開かれた静かな場所を提供し，教会の絵画や音楽が人々の瞑想を刺激する。子供たちのための授業や遊び場のある教会や学校，技術学校や商業学校もある。大学もあり，実験室や大ホール，クラスルームが備わっている。市役所や町役場があり，その壁には都市の歴史を描いたものがあり，そこで市民たちは演説や音楽を聞くために集まる。

公会堂，美術館，浴場，病院，大学，精神病院，刑務所（それらの多くの建物はモザイクで美しく飾られている）は，人々の心をとらえ，思いをめぐらせるようになるだろう。かつてフィレンツエやベネチアの公共施設が多くの市民たちの心をとらえたように。

理想都市は遠く広く拡大するであろう。しかし大気は澄んでおり，煙害のために不健康になったりすることはない。電車がよく整備されており，孤立するような地域もない。清流の流れる小川沿いの通りには木や花が植えられている。騒音のない街路は舗装され，都市の中心部は郊外と同様，快適な住環境を提供している。通りを散策することは快適である。なぜなら通りに面した商店のウインドウはきれいに飾られ，広告は芸術家たちによって管理されている。

理想都市への訪問者は，美しい色合いをもった様々なデザインの建築物に目を奪われるであろう。訪問者は，田舎を懐かしむことはあまりないだろう。彼は都市で空気がおいしく，変化に富み，その静寂さに深い感動を覚えるだろう。理想都市では，それほど大きな貧富の差がないことに気づくであろう。確かに理想都市では，貧富の大きな差はない。富豪の多くは俗っぽく，顕示欲が強い。そして自分の持ち物に価値をおいている。

富を欲する情熱は新しいことである。それは一世紀にわたり，新しいタイプの喜びとして生みだされた。子供時代には欲張って花を摘み，なるべく大きな花束を作ろうとする。しかし後に，彼らは花が傷つかないように引き抜くことを覚える。そして大人になると，花園全体を所有することに最大の喜びを見出す。

人間は，近代化がもたらした富を奪い合おうとする。子供たちが初めて知った花園から，できるだけ大きな花束をつくろうとしたことと同じように。それは無知を単に示しているだけで，時間とともに過ぎ去っていくだろう。次第に，より洗練された喜びがあり，個人で独り占めするよりも，みんなで楽しんだほうが良いと気づくようになるであろう。

理想都市では，知識や美に関心を持つことが，教養ある市民の特徴となっている。彼らは人間がどのように考え，生きて行動するかについて知りたがり，より洗練された美を創造することに喜びを見出すであろう。あまりにも洗練されているために，大きな家を建てたり，温室を次々と作ることに優越感を抱くことはない。さらに死後，大富豪と呼ばれることを望みはしない。彼らはまた，あまりにもキリスト教的であるために，他人が必要とするものを犠牲にしてまで，贅沢品を手に入れたいとは思わない。

私はどんな都市の生活も，個人の宗教的感覚に依存していると思う。人間が最善を尽くせるように力を与え，状況を支配する正義や愛情として，神は存在する。しかし私は，外界の変化が，人々の幸福と性格に与える影響に注目したい。生活はその周辺環境以上のものであるが，周辺環境は生活に影響を与える。

理想都市では，巨額の富が存在しているわけではない。なぜならば教育が富を卑しいものとするであろうし，また都市の誇りというものが，富豪の人々をして，自分のことよりは，むしろ都市を美しくす

ることに富を使いたいと思わせるからである。富豪は公園を作り，公共施設を建設するなど，公益のために富を使うであろう。彼らは公園やホールで演奏するバンドに寄付をし，通りを絵画展のように飾る芸術家を支援する。彼らは，非常にシンプルな生活をしているが，楽しみながらこれらのことを行う。しかし，他者と争ったり，利己心により怒ったり，下品になったり，富を誇示したりはしない。

極貧というものも，また存在しないであろう。なぜなら極度の貧しさは「無視」を意味している。極度な貧しさは，多くの場合，次の理由から起こりうる。誰かが間違いを犯したり，学校が非効率的であったり，あるいは子供たちがずる休みをしたり，飲み屋が多く存在したり，弱者が放置されたり，意欲ある者を訓練しなかったり，健康な者が排水の悪い家や煙害や非衛生な水で病気になったり，さらに貧困者が病気にかかっても十分に看病してもらえなかったり，教育や愛情を受けられないなどの理由である。このように極度の貧困は，無視という事態から生じるものなのである。

貧困者の多くは，今ある状態よりも改善されるべき点が多い。貧困から脱却するための改善は，誰かの助けを得て実現するものである。

理想都市においては，このような無視というものはない。知識と善意が組み合わさり，すべての子供に最高の教育が与えられ，それによって才能をのばしていく。また世界最高水準の健康的な住宅や通りが提供される。病気にかかったものには，最高の医者と快適な病院が提供される。そして悩んでいる者には，手を差し伸べる友人がいる。理想都市では，病気の治療を受けられず教育も受けられず面倒も見てもらえない子供たちに対して，宗教によって鼓舞された政府が対応する。この政府のやり方に反対する者は刑務所に入れられ，教育されるだろう。無視という事態は，ケアに欠けるというよりは，罰がないことによって起こりうるものである。

少数の大富豪，多くの極貧者で成り立つ社会は，芸術が存在できないような雰囲気を生み出す。ウエストコット (Westcott) 司教は言う。「ギリシャ芸術が最も偉大であった時期，芸術は公共のために捧げられていた。近代社会の危険性の一つは，個人の富が増えるにつれ，高水準の芸術が公共的なものではなくなることである」。次のように言うものもいる。「芸術は，少数者に珍重がられ，世間から切り離された珍しいモノではない」

理想都市で芸術は，富のあるなしに関わらず人々の共同生活から生まれる。人々は自分の作品に喜びを見出し，美しいものを賞賛する余裕をもっている。それゆえに理想都市では，大きな都市でよくみられる貧富の格差がない。貧富の格差が生み出す欠点は，自信過剰や自信喪失という精神的不安定である。理想都市では，マッチ売りの子供たちに出会わないだろう。また夕方になり，道路で目的もなく集まり，非行を犯す少年少女に出会わないだろう。大邸宅の階段で，やせ衰え，病気になって眠るような人々に出会わないだろう。さらに無制限に酒を売る酒場に群がり，酔っ払い，無法状態になる人々とも出会わず，母や姉妹のような女性たちが街路で売春をしているような姿も見かけないだろう。

だからといって，都市が単調になるというわけではない。理想都市では，多種多様な人生と職業を見出すことができる。多様な人々の顔つき，服装，波止場に積み上げられた商品，人々が動いている光景によって，理想都市の訪問者は刺激を受けるだろう。また工場や船から，汚れた作業着を着た一群の労働者がでてくるのを見るだろう。あるときは，市場からでてくる一群の買い物客をみるだろう。通りでは，商人や事務員，学生や役人，外国人，船員，女工，主婦が，話しながら急ぎ足で通り過ぎるのをみるだろう。大聖堂から戻る途中，トランペットを吹きながら行進する一群が，独特の洋服と帽子を身に付け，刀を下げているのを見るだろう。労働組合員や友愛協会の行進にも出会うだろう。彼らは自分達

の力を誇示するために，バンドをならし，旗を振っている。役人と交渉するため役所の外に集まった支援者たちで，彼らの姿は見えなくなる。日が暮れると，田舎へ小旅行をする人々や音楽会や演劇をみる人々に出会うであろう。多くの人々が自然の静けさや美しさに出会うためにでかけようと，道路や川べり，鉄道に群がっている。またある者は，音楽や演劇により，あるいは講演より，より大きな思索の世界へと踏み出そうとしている。

もし理想都市への訪問者がそこに住みつこうとするならば，彼の経験はこれらの第一印象を裏切らないだろう。彼がいろいろな場所を旅し，博識な人と出会うにつれ，新しい活動に心を動かされるだろう。こうした人々と接することにより，深い感動を覚え，人間性についての喜びと悲しみを学ぶ。新聞を読めば，賞賛に値する希望や愛情を抱く文学作品をみつけるだろう。さらに見識を広げる新聞記事や書評，英雄物語をみつけるだろう。他者とつきあうことで，理想都市のために何かできることはないか，もっと都市の神の理想に近づくようにできることはないか，そういう雄大な気持ちになるだろう。つまり理想都市の市民は，誰もが前向きなのである。

ここで模範都市の概観をのべよう。理想というものは，実践的なものであり，手の届かないものではない。それは人間の本質を変えるものではないし，社会革命に依存するものでもない。ブリストルは，この模範に従って作られることが可能な都市である。我々の理想都市は，丘に取り囲まれ，海に隣接している。それは豊かな記憶と偉大な実績という過去をもつ都市である。その街路や建物は多くの言葉，つまり市民は愛国者であり，詩人であり，冒険家であった，という言葉で満ちている。そこにいる商人たちは，今日まで冒険家として知られているのではないか。都市に関心を持つ人々，つまり自分自身のことだけに関心を持つのではなく，都市という共有物に関心を持つ人々によって，学校や慈善事業が行われてきたのではないか。我々は記憶の中に生きているのではないか。我々は，キャボット (Cabot)，ケニンジ (Canynge)，コルストン (Colston)，ソーン (Thorne)，カー (Carr)，メアリー・カーペンター (Mary Carpenter)，など有名人の子孫といえるのではないだろうか。

ブリストルの都市が，最も健康的な都市のひとつとなったのは，その有能な医療事務官のおかげではないか。その都市は，最も美しく，最も興味深い都市ではないか。ブリストルは，私が思い描いてきたすべてがあるということができるだろう。ブリストルは成長し続けている。私の少年時代からみて，非常に大きく変化している。街路はよりきれいになり，幅も広がった。住宅は改善され，学校は健全になっている。大学のカレッジとして最初の技術大学があり，そこには評判のよいグラマースクールがあり，蔵書の多い図書館もあり，プールもついている。しかしブリストルは，まだ都市としてあるべき姿には程遠い。まだ他の小都市よりはるかに遅れている部分も多い。

ブリストルは，私が描いてきた理想に近いということができるが，まだ不衛生な小道や囲い地，みすぼらしい公共施設がある。長屋がまだ残っており，秩序を無視した群集もおり，空気は煙害で汚染されており，貧富の格差も大きい，というような側面がある。

ブリストルの行政担当者は，これまで無視されてきたこと，可能なこと，を次ように指摘している。

I

市行政は，職人住宅法の適用により，不適格住宅を適格住宅に作り変える

工場の排気ガスを処理させる

火葬場の建設
高品質でデザインの良い建物を建てる
丘に安く新しいトラム電車をひき，住民を住まわせる
飲食物の衛生管理を厳重にする
下水処理システムを完成させ，河川の浄化をはかる
安宿を定期的に検査・管理する
芸術ギャラリーを建てる
図書館や博物館を日曜にも開く
不適格住宅の禁止
遊技場をつくる
雇用者モデルをつくる
洗濯や入浴施設を増やす
街灯を増やし，警察官の数を増やす

II
教育委員会が子供の精神を重視し，学校を魅力的なものにする
子供たちに体を動かす作業をさせて，実践的な訓練を行う
すべての学校の運動場を十分な広さにする
子供が 14～15 歳に達するまで教育を継続して行う

III
権利擁護委員会は年金システムを整える
少年院を失業者の職業訓練学校にする
診療室を病院にし，すべての病人が利用できるようなものにする

IV
裁判所は居酒屋を統制する

以上のような変更に関わる支出は，必ずしも障害にはならない。現在，日本人ははるかに大きな変化を経験している。50 年前，彼らの生活や政府は，エリザベス女王の時代よりもはるかに遅れていた。しかし現在では，近代社会と同レベルにある。日本人は，ブリストルほどには負担をかけないで，軍隊・海軍学校システムを創設した。

手腕のある都市経営は奇跡をもたらすことができる。そのような幸運がもたらされるのは，相手の「中に」あるのではなく，相手と「ともに」あるのだからである。つまり望ましい生活都市に必要な資金は，納税者のポケットにあるのではなく，支配者の頭の中にあるといえよう。

ブリストルは，豊富な資源がある。(1) 納税価値のある都市の資産が，20 年間で 25 万 6000 ポンドから 38 万 3000 ポンドまで約 50%増加している，(2) 都市の資産は，年間 3 万ポンドを越え，年々増加している。(3) 水道ガス・電車の事業を市が始めるならば，その利益は年間 5 万ポンドをもたらすであろ

う。例えサービスを購入するとしても利益は得られるであろう。(4) 全都市からあがる課税価格は，100万ポンドを越える。

ブリストルは，寛大な心を持った市民からなっている。慈善事業は年間，15万ポンドに達するといわれ，それに関わる人々は，人柄においても高潔なことで有名である。現在，ブリストルで他人の利益のために働く市民は数多い。利己的だといわれてきた雇用者や地主，貴婦人といった人々までも他者の利益のために働いている。歴史的にみて，ブリストルの人々は自分たちの都市に強い愛情を抱くあまり，欠点を直せという外来者に対して腹を立てる。

ブリストルは，蓄えられた富や豊かな市民，命を捧げる男女からなる軍隊があることにおいて，十分な資源を持っている。今，求められている事柄の一つは，システムに統一性をもたらす良い都市経営の手法である。良い都市経営手法というのは，小規模都市で実現しているような事柄を，ブリストルの資源により可能にすることである。モデル的な予算を示すことは難しいことではないだろう。若い改革者がそのような予算を引きだし，実現することは望ましいことである。しかしなぜこのようなことをしなくてはならないのだろうか。ブリストル市民は，都市の統治に対してあまり関心を持っていない。最近の市議会の選挙では，3万3307人のうち，ほんの1036人しか投票しなかった。対立候補のいなかった地区は7区に及んでいる。最近の教育委員会の選挙では，3万3307人のうち，11932人しか投票していない。

市民は，寛大なのかもしれないし，他者に対して関心を持っているのかもしれない。彼らは社会や教会に貢献し，貧困者を救うために貢献する。しかし都市の統治を強化することには関心をもたない。自分の資金を市長や会社に提供するが，公園や美術館などには，あまり寄付しようとはしない。さらに徴税負担を軽減するために遺産を差し出すことはしない。金持ちは，高い役職につくことをいやがり，労働者たちは自分たちの代表者が議会や経営委員会に入って意見を述べることを支援しようとはしない。

市民たちは自分が暮らす都市を好きになっているが，その統治には関心を持とうとはしない。彼らは想像力が欠如しており，想像力を喚起するようなエネルギーに欠けている。理念さえ生まれれば，解決の道は生まれる。理念は，何者よりも強い。もしブリストルの人々が，その可能性を想像するならば，すぐに解決の道は切り開かれるであろう。ブライス (Bryce) 氏は，次のように述べている。「アメリカの失敗は，明らかに都市統治の失敗からくるものである。この失敗は，市民が自分たち自身の関心に埋没しているからである。一人ひとりが自分のために成功するように努力し，お金をため，快楽を求めている。金持ちは郊外の住宅に逃げこみ，貧乏人を締め出している。貧乏人は金持ちになるために努力している。アメリカ人は，都市生活についての理想を持っていはいない」。

コブデンクラブ (Cobden Club) 氏のエッセイの一つは次のように言っている。「真の自治体は，コミュニティ生活を完全に掌握すべきである。そうすることにより，一人はすべてのために，すべては一人のためにという共同の理念を表現することができる」。同じエッセイの別の箇所では，「都市という作品が完全になるためには，あらゆる危険性と欠点が確認され，物質的な欠陥は修正され，知的なものが重要視される必要がある。複雑な機械が着実に作動するためには，定期的に点検することが必要なのである。威厳をもって団体生活を尊重しなくてはならない。熱意と完璧さと自己犠牲の精神を持って公共的サービスの水準を最高レベルに上げなくてはならない。さらに一体感を持って，すべての階級の人々が団結し，名誉あるコミュニティに属しているという感覚を持つ必要がある」。

このようなことは，市民が，都市はどうあるべきだという理念をもたない限り，可能にはならない。

愛情や希望や関心を持って，彼らがもてる力をすべて使い，喜びに満ち溢れている都市を創ろうとしない限り不可能である。さらに議会や運営委員を，都市の美や環境に敏感に対応させるために，市民の時間と財産を使用しなくてはならない。

我々の義務は明確である。我々は将来の理想都市の有り様について力説しなくてはならない。できることを明確にするために，市民の目を開いていかなくてはならない。丘に取り囲まれ，川のそばにある理想的な都市がここにあることを，市民に示さなくてはならない。あるべきブリストルの姿を力説しなくてはならない。すべての選挙民，すべての市民に可能な道筋で，彼らのなすべきことを示さなくてはならない。「今あるブリストル」を「あるべきブリストル」に変えるのに欠けているのは，お金ではなく理念なのである。